ACCESSIBLE DESIGN

The Periodical of

# アクセシブルデザインの総合情報誌 インクル

2008（平成20）年7月25日 NO.55

"Incl."by The Accessible Design Foundation of Japan（The Kyoyo-Hin Foundation）
共生社会の実現を願う妖精「インクル」 「包括的教育理念」を意味する英語「インクルーション」から名付けました

## 目 次 / contents


**「カードの触覚識別記号」、国際規格化がついに実現！**
ISO／IEC、共用品ネットの提案を新規格に（塚本薫） …… 2

**「リコール社告」のJISを制定**
点字新聞・ホームページ活用、ファクス番号記載を明記（星川安之） …… 4

**日本玩具協会の「第１回日本おもちゃ大賞」**
共遊玩具部門はセガトイズ「アンパンマンレジスター」に（高橋玲子） …… 5

**サラゴサ万博で“日本発バリアフリーサービス”**
愛知からスペインへ、日本館の対応を機構が支援（金丸淳子） …… 6

**生理用品の共用品化についての研究調査**
見やすい表示・わかりやすい開口部を探る（森川美和） …… 8

**交通機関で使う「コミュニケーション支援ボード」**
交通エコモ財団、「鉄道版」と「バス版」を作製（竹島恵子） …… 10

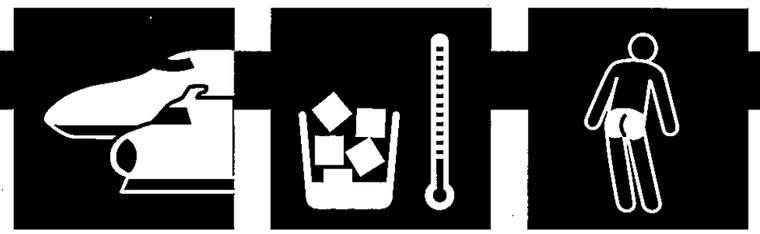
**＜随想　私と共用品＞第33回**
いまそこにある“小文字の障害”（戸村哲次郎） …… 12

**＜この業界・この団体＞　㈶日本障害者リハビリテーション協会**
障害者団体をまとめる“要”の役割担う（高嶋健夫） …… 13

**＜キーワードで考える共用品講座＞　第53講**
「地域発の共用品（下）－事業モデル別の事例」（後藤芳一） …… 14

**＜事務局長だより＞「！」の発見・再発見を糧にして**（星川安之）
**共用品通信** …… 15

**＜わが社のエース＞　東京ディズニーランド「ウエスタンリバー鉄道」**
キャッホー、車いすで乗れる客車ができたよ！（高嶋健夫）
**奥　付** …… 16

■「コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則（JIS T0103）」に収録されている絵記号例。左から「新幹線」「冷たい」「尻」（共用品推進機構ホームページから無償ダウンロードできます）

財団法人　共用品推進機構

# 「カードの触覚識別記号」、国際規格化がついに実現！
## ISO／IEC、共用品ネットの提案を新規格に

共用品ネット（Kネット、代表・児山啓一氏）がE&Cプロジェクト時代から実現をめざし国内外の関係者に働きかけを続けていたクレジットカード、キャッシュカードなどIDカードを識別するための“セルフマークエリア”の規格提案が、この6月、ついに国際標準化機構（ISO）／国際電気標準会議（IEC）の国際規格として制定された。日本の市民団体の提案によって国際規格が誕生するのは、アクセシブルデザイン関連では初めての快挙である。そこで、Kネット「マネー&カードプロジェクト」メンバーで、ISOの担当委員会「ISO/IEC SC17/WG1」国内委員会委員でもある塚本薫さんに、新しい「触覚識別マーク（TIM）」の概要とこれまでの経過について報告していただいた。

### プリペイドカードの「切り欠き」JIS化の経験を生かす改善

皆さんは、銀行の現金自動預払機（ATM）の前で複数のカードから目的の1枚を取り出す際に手間取ったり、カードの裏表や挿入方向を間違ったりしたことはありませんか？

特に視覚障害者や視力の低下した高齢者にとっては、カードの識別は難しく、生活に関わる非常に深刻な問題となっています。

私たち市民団体「共用品ネット」では、この問題の解決に10年以上前から取り組んできました。

私たちは1996年に発行したプリペイドカードの「切り欠き」に関する日本工業規格（JIS X6310「プリペイドカード－一般通則」）の時の経験を生かし、カードの種類やその表裏、挿入方向が触るだけでわかり、既存のカードのデザインやATMなどの機械に問題を生じさせない識別方法・デザインを検討してきました。

■2004年沖縄のISO会議でプレゼンテーションする芳賀優子さん

### 「3文字分の点字」か「18の凸点」“余白”に自由に指定して刻字

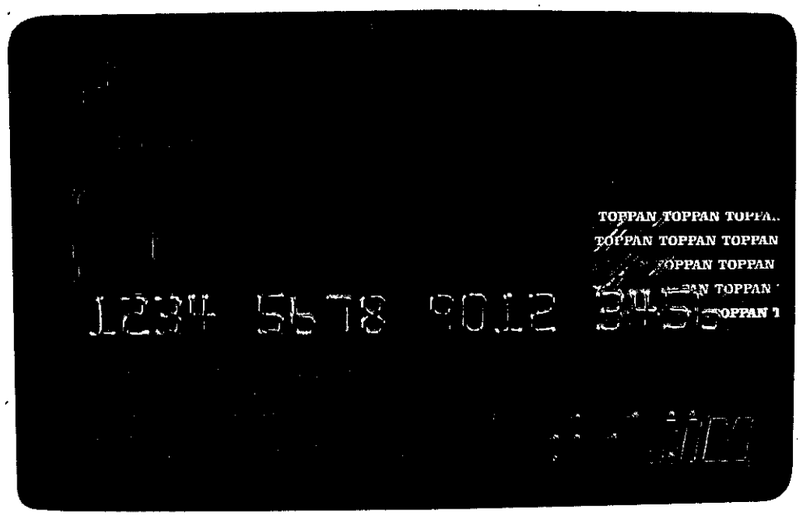
最終的に、カードの住所や名前を記載する領域の中のあまり使われていない部分（表側の右下部分）を利用し、ユーザーが「3文字分の点字」、もしくは「18の凸点を使ったオリジナルのマーク」を自由に指定して刻字する方法を提案しました。

当時はすべての人が1人で（by oneself）カードを使えるようにという思いを込めて

■2006年バルセロナのISO会議でのペレスWBU事務局長



■触覚識別マークを付けたサンプルカード。右下に見える点字部分がマークの領域




「セルフマーク」という名称で標準化を提案。2001年には全国銀行協会の参考規格にしていただき、さらにSC17/WG1国内委員会の主査であった寄本義一氏や中澤明氏などの協力を得て、ISO化を目指すことになりました。

ISOの国際会議でも、アクセシビリティーに配慮する提案の必要性を各国の技術検討委員に理解していただくことは大変でした。04年の沖縄での国際会議には、メンバーの芳賀優子さんが弱視である自らの体験を元に日常生活でのカードの不便さを寸劇風にプレゼンテーションしてセルフマークの必要性を訴え、理解を求めました。

また、別な識別パターンを提案していた英国盲人協会（RNIB）のギル博士やヨーロッパ規格協会（CEN）との協力や調整も欠かせませんでした。

06年3月にバルセロナで開かれたISO国際会議では、世界盲人連合（WBU）のペレス事務局長に、カードの触覚識別記号がいかに視覚障害者に有効で、この規格を必要としている人が多いかを強力に訴えていただきました。そのおかげで、反対を表明していたフランスなどの委員も説得でき、最終的に全会一致で国際標準化に向けて審議を開始することが決まりました。

### 「触覚識別マーク（TIM）」よりわかりやすい名称に

この会議で、「セルフマーク」というそれまでの呼び名を、世界中の人々によりわかりやすく、親しみやすいものとするために、「Tactile identifier mark（TIM：触覚識別マーク）」という名称に改められました。

そして、去る6月1日、新しい国際規格「ISO/IEC 7811－9（Tactile identifier mark）」として発行されることとなりました。

日本から、しかも市民団体から「ISO／IECガイド71」（高齢者・障害者配慮設計指針）に基づいた提案を行い、それがISO規格となるのは今回が初めてです。この背景には、名前を挙げ切れないほど多数の障害者団体、国際標準化の関係者、その他世界中の方々の協力と支援がありました。

TIMの標準化は、使いやすいカードの実現に向けたまさに「はじめの一歩」で、実用化というさらに大きな課題を乗り越える必要があります。

私たちは今後も、誰もがカードを安心して使えるよう、金融機関やカード発行会社などへ広く協力を呼びかけるなど、TIMの普及活動に取り組んでいきます。　（塚本　薫）

# 「リコール社告」のJISを制定

## 点字新聞・ホームページ活用、ファクス番号記載を明記

**経済産業省は、消費者に必要な情報が伝わり、理解しやすく、読みやすい「リコール社告」の普及を目的として、記載すべき項目・内容を規定した新しい日本工業規格（JIS）を6月20日に制定・公示した。この審議には㈶共用品推進機構から星川も加わり、視覚障害や聴覚障害のある人に対するアクセシブルデザインの配慮が盛り込まれることとなった。**

**（星川安之）**

### 「消費者の声」を受けて主婦連合会が提案

「リコール社告」とは製品の回収・点検・修理や使用上の注意喚起などに関する社告を指し、今回のJIS化は主婦連合会（主婦連）の提案で実現したもの。

主婦連が2006年度から実施した「消費者の望む標準化調査研究事業」の中でアンケートを実施したところ、「新聞の社会面の下などに掲載される製品回収や注意喚起などについての社告が、会社ごとにまちまちな書き方がされており、消費者にとってわかりにくい」という声が多くあがった。

そこで主婦連は、JISを統括する日本工業標準調査会（JISC）に社告のJIS化を提案。日本規格協会が事務局となって審議が進められ、今年6月発行の運びとなった。

「消費生活用製品のリコール社告の記載項目及び作成方法（JIS S 0104）」と題されたこの規格では、リコール社告に掲載すべき項目として、次の10点を定めている。

①リコールタイトル
②危険性、事故の状況およびその原因
③消費者が取るべき対応策
④回収、点検・修理など、消費者への要請
⑤製品の特定方法
⑥連絡先
⑦リコール社告の回数とこれまでの回収率
⑧ホームページアドレス
⑨日付
⑩その他必要な事項

### 高齢者・障害者への配慮随所に盛り込む

この規格を作成する審議の過程で、高齢者・障害者に対する配慮を盛り込むことが必要ではないかとの意見が多く出て、共用品推進機構も委員として議論に加わった。

その結果、規格の随所に高齢者・障害者に対するアクセシブルデザインの配慮が盛り込まれることとなった。

特に、一般原則においては「視覚障害のある人々には点字新聞（音声版を含む）の活用、及びホームページによるリコール社告では、利用者がイラスト、写真などの内容を、音声ソフトなどを用いて的確に理解できるようテキストなどの代替情報を提供するのがよい」と明記されたことは大きな成果と言える。

その際の参考文献として、「ウェブコンテンツ」に関する高齢者・障害者配慮設計JIS（JIS X8341－3）が示された。

また、「連絡先」についても、耳の不自由な人たちに配慮して、住所・電話番号などに加えて、「ファクシミリ番号」を記載することが推奨されている。

この新しいJISが契機となり、今後は「リコール社告」だけでなく、他のさまざまな社告にもアクセシブルデザインの配慮が広がっていくことを願っている。



# 日本玩具協会の「第1回日本おもちゃ大賞」

## 共遊玩具部門はセガトイズ「アンパンマンレジスター」に

「バナナ100円、お茶150円、全部で250円です」――触っても楽しいおもちゃの果物やボトル、箱などを「バーコードリーダー」に近づけると、アンパンマンの声が値段を教えてくれるおもちゃのレジスター。アンパンマンの声を頼りに、数字ボタンを使って簡単な計算をすることもできます。

「これはすごい！」と、おもわず大人も夢中にさせられてしまう優れた「共遊玩具」。目や耳の不自由な子供たちも一緒に楽しめるように工夫されたおもちゃのうち、一般市場で販売されるものを「共遊玩具」といいます。

優れたおもちゃ、楽しいおもちゃをもっともっと知ってもらおう――そんな目的の下、㈳日本玩具協会は「日本おもちゃ大賞」を創設し、6月17日に第1回目の受賞作品を発表しました。応募対象は、2007年10月～08年9月に発売（予定）のおもちゃ。大賞には5つの部門が設定され、「トレンディ・トイ部門」「ベーシック・トイ部門」などと並んで、「共遊玩具部門」も設定されました。

応募総数は365点。共遊玩具部門には、触って識別できる凸点や音声・光の点滅などで状態を伝える工夫がなされたおもちゃなど、11社から計25点の応募がありました。最終審査は「おもちゃコレクター」の北原照久氏をはじめ、玩具店、雑誌社、さらに共用品推進機構など計17名が当たり、各部門から「大賞」1点と「優秀賞」4点が選ばれました。

共遊玩具部門の大賞に輝いたのは、冒頭で紹介したセガトイズの「おしゃべりいっぱいアンパンマンレジスター」＝写真。この商品の担当者は企画の段階から、その仕様について玩具協会に相談に来られていたこともあり、今回の受賞は、これまでこの活動を推進してきた私たちみんなにとっても、とてもうれしいものでした。

### 優秀賞は「エアギター」など4点が受賞

優秀賞に選ばれたのは、光や触れたことなどに反応しておしゃべりするぬいぐるみ「プリモプエルシリーズ」（バンダイ）、音で楽しくかな文字が覚えられる学習ボード「ミッキーマウスクラブハウスおしゃべりあいうえお」（タカラトミー）、手軽に本格ギター演奏の気分が楽しめる「AIR GUITAR PROアコースティックギター」（同）、声に反応して光るアニメのなりきりアイテム「きらりんスターライト☆ヘッドセット」（同）の4点。

今回は、共遊玩具部門にどれだけの応募があるか、また他部門と同数の「優秀賞」を選ぶことができるか、内部で関わった者としてはとても不安でした。しかし、実際には、これまで共遊玩具の活動に参加していなかったメーカーからの応募や、思いの外多岐にわたる種類の商品の応募があり、充実した楽しい審査をすることができました。

今後も、「日本おもちゃ大賞」が玩具業界の発展を促すと共に、共遊玩具開発の推進力の1つとなってくれたら、と心から願っています。

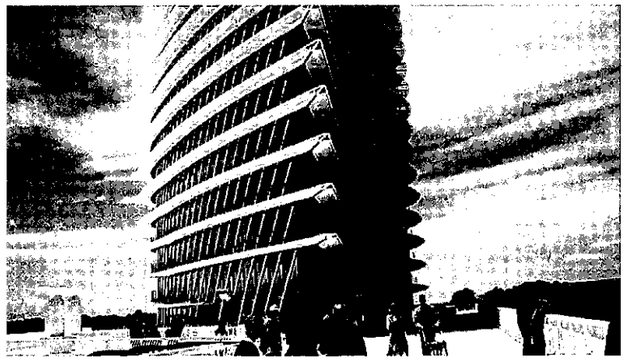
**（㈳日本玩具協会**
**共遊玩具推進部会部長・高橋玲子）**

# サラゴサ万博で“日本発バリアフリーサービス”
## 愛知からスペインへ、日本館の対応を機構が支援

EXPO ZARAGOZA 2008

スペイン第５の都市・サラゴサで６月14日、「水」をテーマとする「サラゴサ国際博覧会」が開幕した。この万博で、㈶共用品推進機構は海外パビリオンの１つとして出展した「日本館」のバリアフリーサービス向上のため、スタッフが使用するマニュアルの作製と障害のある来館者のためのサービス研修に関わらせていただいた。その目的は、2005年の「愛・地球博」で培った高齢者・障害者向けサービスのノウハウをサラゴサ万博につなげていくことである。開幕直前に行われた現地での最終検証と研修の模様を報告する。

（金丸 淳子）



■会場内にひときわ高くそびえ立つ「水のタワー」

### 日西合同でマニュアルを作製

日本館のバリアフリーサービスに関しては、昨年12月に同地を訪問し、サラゴサ万博公社とスペインの障害者団体「CERMI」から協力を約束していただいていた。CERMIは視覚、聴覚、身体に障害のある人や知的障害のある人の団体など12団体からなる協議会で、サラゴサ万博でのアクセシビリティー向上にも協力している。

この訪問から約４カ月間、万博公社・CERMI・日本の三者合作によるマニュアル作りが続いた。スペインの法律やマナー、習慣を取り入れ、何度も修正を加えていき、スペイン語、英語、日本語と３カ国語を使いながらのやり取りの末、完成に至った。

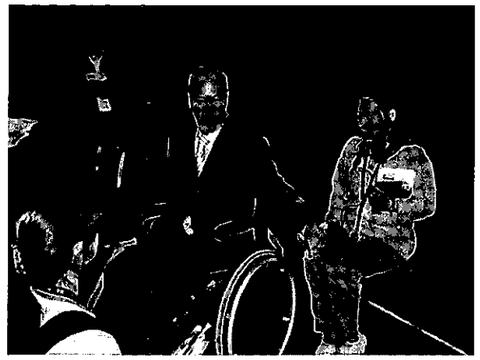
そして、開幕直前の６月5〜7日、日本館内で障害者団体の関係者による検証作業を行い、注意箇所を抽出したうえで、スタッフに対するバリアフリーサービス研修を行った。検証、研修ともに、車いす使用者であるペドロ・サンチェス会長、全盲の書記長、耳の不自由な人、弱視の人の異なる障害を持つ４名の方々が参加してくださった。

### 日本館内で現地の障害者が検証と研修

日本館の展示はシアターでの映像上映がメイン。前方と左右の計３面からなる巨大スクリーンに、江戸時代後期の日本の水利用や資源リサイクルを浮世絵を素材とした約10分の映像で映し出す。それを楽しんだ後、隣のゾーンへ移動し、出される お茶を飲み、展示物を見てくつろぐという形式になっている。

１日目の日本館内の検証では、視覚・聴覚障害者、車いす使用者にそれぞれ動線に沿って歩いていただき、注意箇所、変更したほうが良い点などを指摘してもらった。障害のある人たちが他の来館者と一緒に楽しんでもらえるよう、たくさんのアドバイスをいただいた。それらを総合すると、インフォメーションセンターで事前にサービスに関する情報提供をしっかり行い、それぞれの来場者に自分が必要とするものを選んでもらうようにすると良いという意見だった。

その翌日には、関係者による万博会場全体の内見会が行われた。まだ開館していないパビリオンも多かったが、会場内は多くの人でにぎわっていた。この日の日本館の来場者数は1796人で、パビリオンの入口には長い列ができていた。障害のある人もたくさん来ていたが、トラブルもなく無事に１日を終えることができた。



■ペドロ・サンチェスCERMI会長と研修を受ける日本館スタッフ

■内見会で日本館前にできた入館待ちの長い列

３日目はスタッフ研修が行われた。検証の時と同じ４名の障害者が、前々日の検証で指摘した注意事項や、障害のある人たちへのスペイン流の応対方法などについてユーモアたっぷりに講義してくださった。

講師の方々に後で聞いた話によると、研修が始まり、スタッフの前に立つと、みんな顔がこわばっていたそうだ。そこで、なんとかリラックスしてもらわなければと、冗談も交えながら、時には笑い声があがるような楽しい研修にしてくれた。

日本を発つ前の５月にも日本国内で事前のバリアフリーサービス研修を行っていたが、その研修を受けても、それがスペインで通用するのかと不安をぬぐえないスタッフもいたそうだ。しかし、スペインの障害者から直接、話を聞けたことで、それまで疑問を持っていたスタッフたちも安心できたことだろう。

### 今後も日本から全力でバックアップ

内見会の日、70%ほど開館していた海外パビリオンの一部を見学した。日本館では、映像には字幕を付け、上映されるストーリーのシナリオ、音声ガイドを準備し、希望する方には点字パンフレットを配っていた。しかし、他のパビリオンでヒアリングを行ったが、そこまでのツールを用意しているパビリオンはなかったように思う。

ただ、会場内にあるインフォメーションセンターのうちの４カ所では、会場内の音声ガイドや手話や文字が映し出されるPDFの貸し出しを行っている。そこにいる障害のあるスタッフもCERMIの職員であり、前日の日本館の検証にも参加してくれていた。

夏のスペインは夜９時を過ぎてもまだまだ明るい。会場は午前３時までオープンしているので、愛知万博とはまた違った楽しみが満喫できそうだ。その一方、真夏は気温が40度を超え、朝晩の温度差も大きい。慣れない土地で50名近くの日本人スタッフが頑張っている。お客様はもとより、そのスタッフの方たちのためにも、今後も日本でのサポートを続け、さらに日本館のバリアフリーサービスが向上するよう取り組んでいきたい。

■熱心にメモを取りながら研修に参加する日本館スタッフの皆さん

# 生理用品の共用品化についての研究調査
## 見やすい表示・わかりやすい開口部を探る

**㈶共用品推進機構は2005年度から「生理用品の共用品化についての研究調査」事業に取り組んでいるが、昨07年度は前年までのアンケート調査結果などを踏まえて、生理用品のパッケージデザインの表示ならびに開け口部分の表示について、サンプルデザインを用いた調査を実施した。その結果、表示する色の組み合わせやコントラストが「わかりやすさ」に大きく影響することが改めて明らかになった。**

（森川美和）

2006年度の調査では、生理用品に対して感じている便利さと不便さについて調査し、相反する結果が出た。例えば、識別および表示については、「種類が豊富になり、選択肢が広がった」ことが便利になった半面、視覚的に情報を得ることが困難な人には、「多くの種類から目的に合った商品が選べない」ことや「文字情報だけのパッケージでは肝心の情報が得られずに不便さを感じる」と指摘された。

開封についても同様に、パッケージのミシン目やナプキンの個別包装の簡易性、操作性などが向上した点への評価が高い半面、ミシン目や個別包装のシールの位置などがわかりづらいことや、シール（テープ）の粘着性が強く、手の自由が利かない人たちにとっては操作しづらいとの意見が聞かれた。

開封については各社特許やコストの問題があり、一挙に解決できる事柄ではないが、識別・表示方法については調査結果からすぐに取り組める課題もあると、メーカー側からの提案があった。

そこで、07年度は生理用品のパッケージにおける表示方法について、デザインのサンプルを作成し、主に知的障害のある人、弱視の人、障害のない人に対して調査を行った。なお、この調査は㈶日本性教育協会の助成と大日本印刷㈱の協力を得て実施した。

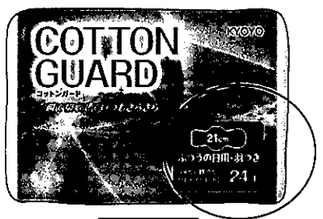
### 「１カ所に情報が集中した表示」に高評価

アンケート調査は、団体ならびに企業に依頼して行い、回答者は109人（回答率100%）。このうち、障害のある人は全体の７割で、さらに障害があると答えた人のうち、知的障害のある人が約８割を占め、その中でも約３割の人は小さい字が見えづらい、よく見えない、ぼやけて見えるなどの視覚的な不便さがあり、3割が知的障害に加え身体的な障害を抱えている。また、弱視の人は全体の15%程度で、その他身体的な障害がある人と精神障害の人からも回答を得た。

調査は「正面から見た表示方法」と「開け口部分のガイド表示」の２点について、それぞれ数パターンのサンプルデザインを用意し、どれがわかりやすいかを調べた。

■正面から見た表示方法のサンプルデザイン

表示Ａ




表示Ｂ

表示Ｄ



まず、「正面から見た表示方法」については、６つの表示パターンを用意し、このうち、最もわかりやすいものと２番目にわかりやすいものを選んでもらった。結果は、1番わかりやすいのはＡのデザインで、５割強と最も多くが支持。続いて、Ｂ、Ｄの順となった。

Ａの表示は、右下の１カ所に情報が集まっているため必要な情報が一度に得られる利点に加え、白地に青い文字を用いているためコントラストがはっきりしていることが選ばれた理由であると思われる。

Ｂの表示も、Ａと同様の利点があるが、青地に白い抜き出し文字を使用しているため、包装自体の色と青地の表示部分が同化してしまい、情報が探しにくいことが推測される。

Ｄの表示は１カ所に情報が囲まれているわけではないが、左から右へ一列に情報が並んでいるため、情報が探しやすく読みやすい。しかし、ＡやＢの表示に比べるとわかりにくいと答えている人も多く、賛否両論分かれる表示であることもうかがえる。

### 色の配色、コントラストが見やすさのカギ

一方、「開け口部分のガイド表示」では８つパターンを用意し、同様に、最もわかりやすいもの、２番目にわかりやすいものを選んでもらった。その結果、一番わかりやすいものはＡの表示で、７割弱が支持。続いて、Ｂ、Ｃの順となった。

Ａの表示は、包装自体の青色（背景色）と補色関係にあるピンク色を用いることで、コントラストをはっきりさせ、目にとまりやすくなっている。

Ｂの表示もほぼＡと同様で、青色と補色関係にあるオレンジ色は、２番目にわかりやすい支持を得たうえ、わかりにくいと答えた人も最も少ないため、「背景色と補色関係にある色を用いて示すことによって、開け口がわかりやすくなる」ことが明らかになった。

ＡやＢに対する支持よりは大差があるが、Ｃの表示もわかりやすいとした人が１割程度いた。サンプルに使った背景色の青色と切り口のライム色はいずれも飽和色に近く、特にライム色が鮮やかだったため、目を引いた可能性もあると考えられる。

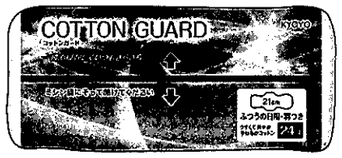
このほか、情報をまとめた表示例12パターンの調査も実施したが、同様に、色の組み合わせやコントラストが、情報のわかりやすさを左右することが明らかになった。

### 今年度は「ガイドライン」を策定へ

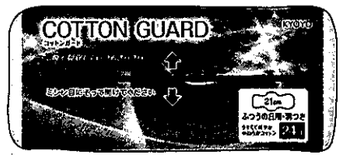
機構では今回の調査で得られた結果をもとに、08年度も本事業を継続し、以下の検証とガイドライン案の作成を行う計画だ。

「弱視の人たちにとって情報を１カ所にまとめて提供することが必要」との結果は得られたが、色の問題やコントラストについては、それぞれの人によって見やすい色の範囲が違うため、どの範囲であれば見ることが可能か、追加調査を行う。さらに、今回得られた結果をもとに、コントラストや色の使い方について専門機関に検証してもらい、より効果的な指標を示すとともに、表示のあり方について、総合的なガイドライン案を作成する。

■開け口部分のサンプルデザイン




表示Ａ




表示Ｂ

表示Ｃ

# 交通機関で使う「コミュニケーション支援ボード」
## 交通エコモ財団、「鉄道版」と「バス版」を作製

㈶交通エコロジー・モビリティ財団はこのほど、鉄道やバスなど公共交通機関で使用するための「コミュニケーション支援ボード」を作製した。各種の絵記号・図記号（ピクトグラム）を用いて、障害のある人や日本語のわからない外国人などの利用者と駅員ら交通機関スタッフの会話を助けるアクセシブルデザインの専用ツールだ。そこで、同財団バリアフリー推進部の竹島恵子さんにその内容や使い方について、ご寄稿いただいた。

駅の改札口などで、高齢者や障害のある人、外国人など、文字や言葉でのコミュニケーションが困難な方をサポートするためのボードを見かけたり、使ったことはありますか？

交通バリアフリー法（2000年）、バリアフリー新法（2006年；高齢者、障害者等の移動等の円滑化促進に関する法律）の施行により、駅やターミナルなどの公共交通機関においてスロープやエレベーターなどのハード面における整備が日々推進されています。

その一方、交通事業者と利用者間のコミュニケーションを中心とした応対などソフト面における整備は、いまだ充実した状態とはいえない状況であり、社会の各方面からさらなる取り組みが期待されているところです。

また、バリアフリー新法の「公共交通機関等移動等円滑化基準に基づく公共交通機関の旅客施設に関する移動等円滑化整備ガイドライン」（バリアフリー整備ガイドライン旅客施設編）と、「公共交通機関の車両等に関する移動等円滑化整備ガイドライン」（バリアフリー整備ガイドライン車両等編）でも、鉄軌道駅の改札口、乗車券などの販売所・待合所・案内所、高速・リムジンバスを含む路線バス、福祉タクシー、一般タクシーにおけるコミュニケーション設備の望ましい方向性を示すものとして、コミュニケーション支援ボードの設置があげられています。

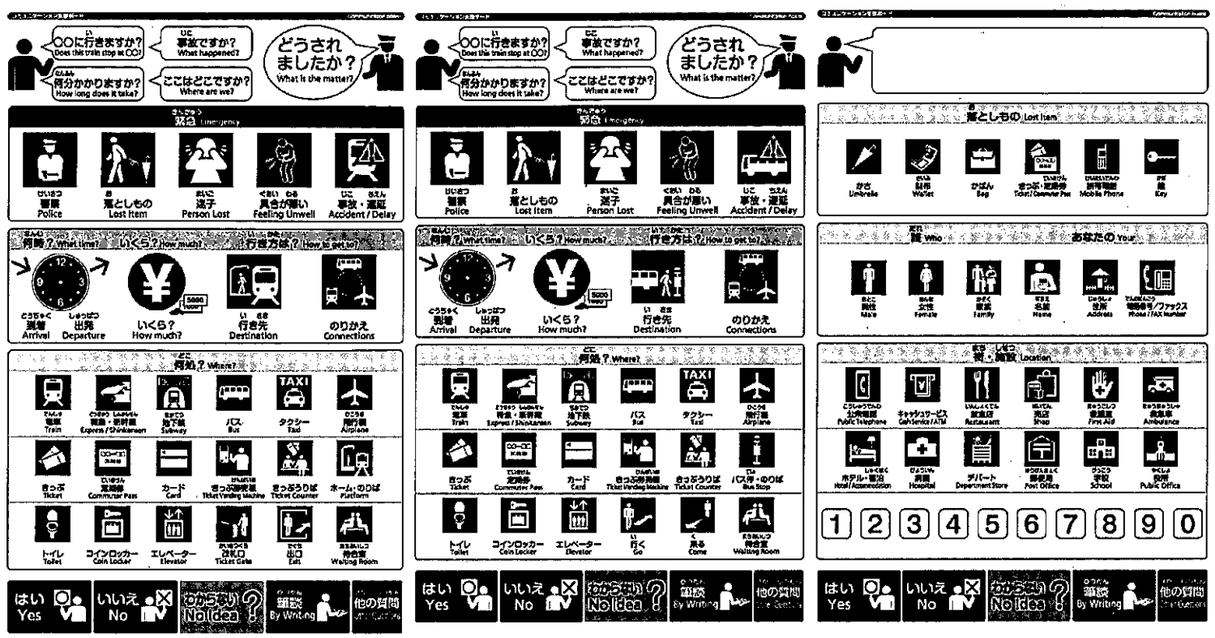
### メインボード、サブボードの２枚で構成

そこで当財団では、各種交通機関におけるソフト面でのバリアフリー化を推進する観点から、知的障害、発達障害、聴覚障害、高齢者、日本語がわからない外国人などの利用者が公共交通機関を利用するさまざまな場面においてコミュニケーションを円滑に行うためのサポートツールとして「コミュニケーション支援用絵記号デザイン」や「コミュニケーション支援ボード（鉄道版とバス版）」を作製しました。

これは、お互い言葉でうまく伝え合えない時に、駅員が必要な項目を指さしたり、利用者に指さしてもらったりしながら会話をすることを目的としており、「鉄道版」は主に駅の改札口や案内所、「バス版」はターミナル、案内所やバス車両の中などに設置されることを前提としています。

今回作製したボードは、メインボードとサブボードの２枚で構成されています。Ａ４判の両面使用になっていて、メインボードの表面は用件を尋ねるためのもので、裏面は自社の路線図や構内案内図などを貼り付けられるようになっています。

そして、サブボードの表面はメインボードを補足して使用するためのもので、裏面は地域の福祉施設の連絡先などを書き込めるようになっています。



■コミュニケーション支援ボード（左は鉄道版メインボード、中はバス版メインボード、右はサブボード）

使用している絵記号は、「コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則（JIS T0103）」と「案内用図記号（JIS Z8210）」、さらに今回独自に作製した絵記号デザインから構成されています。

### 上手に使うためのマニュアルも作製

また、ボードと共に『交通機関におけるコミュニケーション支援ボードの上手な使い方について』というマニュアルも作製しました。これは駅員などがボードの使い方や使用上のポイントを理解するためにまとめたもので、使用上のポイントは、次の３点です。

①利用者のペースに合わせて、事業者が会話をリードしながら状況を尋ねる
②ボード以外に筆記用具なども準備しておく
③コミュニケーションの基本姿勢は「ゆっくり」「ていねい」「くり返し」

今回のボードは初めてのものですので、今後も皆さんに使っていただきながら、バージョンアップをしていきたいと考えています。今後は、事業者ごとにカスタマイズできるような仕組み作りや携帯タイプの作製なども検討していきたいと思います。

当財団では皆さんからのご意見やご提案を望んでいます。サンプル版をご希望の方は、下記までご連絡ください。お送りさせていただきます。　（竹島恵子）

■連絡先：㈶交通エコロジー・モビリティ財団バリアフリー推進部（担当：岩佐、竹島）
〒102－0076　東京都千代田区五番町10
五番町KUビル３階
TEL：03－3221－6673
FAX：03－3221－6674
Eメール　k－honda@ecomo.or.jp（竹島）

## 随想 第33回 私と共用品

# いまそこにある“小文字の障害”

戸村哲次郎（TOTO㈱UD推進本部）

小学生のころに中耳炎の手術をして以来、私の左耳は「80代」の性能しか持ち合わせていない。高音が苦手な左耳と、普通の性能の右耳で生活してきたが、頼りの右耳が年齢相応に50代の性能まで順調に（!?）低下してきたため、こと聴力に関しては確実に「老化」を実感している。

視力のほうは、かれこれもう40年来のド近眼人生に最近は老眼が加わったため、近場を見るメガネも持ち歩き、場合によって掛けかえる不便さを実感しながらも、このメガネを忘れた時はどうにも見えないので、メガネを外して裸眼で見たいものにひたすら超接近して読んでいる。おそらく、傍目には相当に格好悪いのだろうと思いながらも、見えないのだから仕方がないと、気にしないフリも年齢相応かもしれない。

さらにド近眼のうえに上下斜視なのだから、これはもう正確に見ることはできない。漠然としか見まい、と心に決めたら少し気がラクになったが、これで終わらない。

### 一番つらい「しわがれ声での意思伝達」

複雑な人体システムがバランスしている限りは良いのだけれど、ひとたびこの絶妙なバランスが崩れると、あちこちに歪みが出てしまう。小さな歪みのうちならさしたる不都合は感じないが、やや歪みが大きくなると、さてさて厄介な事態になってくる。

3年ほど前に大病をしてしまった関係で、最近の不都合は「発声障害」である。澄んだ声ではなく、しわがれ声でも出ている限りは日常生活にさしたる不都合はなかった。ところが、このしわがれ声すら出ずに、ヒソヒソ話くらいにしか声が出せないことがある。ヒソヒソ話を聞き取るのが苦手だった自分が、である。はてさて、これは困った。毎朝、コーヒーショップで「ブレンドをブラックで」というのも伝わらない。ひたすら口を大げさに動かす。こちらはお客だから相手は聞こうとしてくれるので、このシチュエーションでは何とか注文が通る。もしも逆の立場だったら、多分通じないままだろう。

しゃべるのがつらいなら、あとはもともと寡黙なのでしゃべらずにいれば良いだけだが、世の中なかなかそうはいかない。

今は、これが一番つらい。コミュニケーションが取れない、取りにくいということがいかにつらいことか、身に染みる。

### 聞こえにくい、見えにくい、話しにくい…

聞こえにくい、見えにくい、話しにくい。どの能力もゼロではないが3つ合わさると、さまざまな不都合を実感する。なかでも、コミュニケーションが取りづらくなることは、いかに大変で、生活の質を低下させてしまうかを実感する。

最近、「障害」を「障がい」と表記する傾向が散見される。共用品推進機構を通じて交流させてもらっている何人かの方々にご意見を聞いてみたところ、文字表現は表層の問題であり、根本・本質は別だ、とのご意見が多く、「障害」と常に向き合っている皆様の発言の重みを実感した。

私なぞ、漢字に小文字があるなら、小文字の障害しか持ち合わせていないことに気づく。気づいていないよりも気づいている分、まだよしとさせてもらえるだろうか。

（題字は中野奈津美・㈶共用品推進機構運営委員）



＜この業界・この団体＞㈶日本障害者リハビリテーション協会（JSRPD）

# 障害者団体をまとめる“要”の役割担う

障害当事者と専門家によるリハビリテーションの振興を目的に1964年に設立された。国際リハビリテーション協会（RI）の日本の窓口機関でもあり、障害のある人が利用できる施設などで見かける世界共通のシンボルマークの国内での使用管理を行っていることで知られている。

その事業内容は、年1回の総合リハビリテーション研究大会の開催、障害者リハビリテーションに関する調査研究、障害保健福祉分野の外国人研究者の研修受け入れなどの国際協力事業をはじめ、多岐にわたる。

共用品・アクセシブルデザイン（AD）に関連するものでは、①録音図書の国際標準システム「DAISY（デイジー）」の普及促進、②障害者情報ネットワーク「ノーマネット」（http://www.normanet.ne.jp/）の運営、③障害者放送協議会への参加と協力――などが挙げられる。このうち、③については事務局を担当し、デジタル放送化に伴う字幕放送や音声解説放送の拡大実現などを推進している。

### 「国連障害者権利条約」批准を推進

もう1つ、大きな役割が「日本障害フォーラム（JDF）」への参加と協力だ。JDFは「アジア太平洋障害者の10年」（1993～2002年）を契機に、国内の障害者団体・同関連団体の連携強化を目的に、日本身体障害者団体連合会、日本盲人会連合、DPI日本会議など12団体が04年に設立したもので、リハ協はここでも事務局を担当している。

JDFは現在、「第2次アジア太平洋障害者の10年」関連事業の推進、「国連障害者権利条約」の批准と関連国内法令の改正・整備、障害者の差別禁止に関わる法制度の確立といった重要なテーマに取り組んでいる。その意味で、“障害者団体の要役”として、リハ協への期待と果たすべき責任は今度ますます大きくなっていきそうだ。

（高嶋健夫）

●JSRPDが国内使用を管理する国際シンボルマーク（右）と、JDFが刊行した高校生のための障害者権利条約のガイドブック『みんなちがってみんな一緒！』の表紙（左）

■㈶日本障害者リハビリテーション協会

設　立　1964年
総　裁　常陸宮正仁殿下
会　長　金田一郎（かねだ・いちろう）氏
事務局　〒162-0052　東京都新宿区戸山1-22-1
　　戸山サンライズ内
問い合わせ先　TEL：03-5273-0601　FAX：03-5273-1523
ホームページ　http://www.jsrpd.jp/

＜アクセシブルデザインの普及に向けて一言＞

## ノーマライゼーションへの理解を広げる共用品

片石修三・㈶日本障害者リハビリテーション協会常務理事兼事務局長

私たち協会の仕事は、必ずしも共用品に直接結び付くものではないが、「みんなが同じモノを使う」という共用品の考え方は素晴らしいものだと常々思っている。

障害のある人や高齢者が抱える問題を解決するために一番大事なことは、国民全体が問題を理解し、共有すること。「困った人がいれば、みんなで助け合おう」――バリアフリーに関わる課題の多くは、こうした考え方があれば解決することができる。

共用品を通じて障害者への理解が広がれば、高齢者への理解も広がる。ノーマライゼーションの実現をめざす時、共用品は子供たちにとっては格好の教材となるし、企業にとっては経済的インセンティブとなる。私たちも共用品のさらなる普及に向け、今後も全面的に協力していきたいと考えている。（談）

キーワードで考える共用品講座　第53講

# 「地域発の共用品(下)－事業モデル別の事例」

後藤芳一（ごとうよしかず）（㈶共用品推進機構運営委員、日本福祉大学客員教授）

共用品[③⑩⑪⑭⑯～㉛㊷㊹～㊾]（小さい添え字①～㊾は、同様の用語が本講の第１～52講に既出であることを示す）の幅を広げるうえで、地域の資源が活用できる。**中小企業地域資源活用促進法**（2007年施行）[㊿㊿]により、**経済産業省**[㉔㉙㊲㊳㊴㊵]などから事業計画の認定を受けた328件（08年３月現在）から、共用品に関わりのある取り組みを「**事業モデル**」で分類して整理する。

## １．技術も原材料も、共に地域に特有

技術（例：加工法）も原材料（例：農林水産品）も、ともに地域に特有のものを活用するもの。地域としての独自性を強く出すことができる。

経木で新機能折り箱[㊿]（北海道津別町）、テープ状加工ブナ材でインテリア品[㊿㊿]（青森県弘前市）、曲げわっぱ高齢者食器[㊿]（秋田県大館市）、含漆ＵＶ塗装[㊿]（福島県会津若松市）、絹成分を染ませたメリヤス[㊿㊿]（群馬県桐生市）、繭からニット品へフルオーダー生産[㊿㊿]（同）、蛋白などを半分に抑えた米（新潟県長岡市）、多様な熱源に対応する陶製調理器（三重県名張市ほか）、立体和紙によるデザイン[㊹㊺～㊾]照明具（鳥取市）など。

## ２．技術が地域特有、原材料は一般的か地域外

地域に特有の技術を活用する。その地域で産出する原材料を活用した加工方法として発達・蓄積したが、材料の枯渇などによって国内外から調達した原材料に、加工法などの技術を用いる場合である。

防水木製水回り製品[⑩⑪～㊾]（北海道旭川市）、手すき和紙の工芸家具[㊿㊿]（栃木県那須烏山市）、和紙製ニット・レース[㊿㊿]（群馬県桐生市）、軽量IH用鍋[㊿]（新潟県燕市）、２次加工和紙（山梨県市川三郷町）、UD[③⑥⑩⑭⑯⑰㉑㉓㉕㉗㉙㉛㉝㉟㊶㊷]刃物（岐阜県関市）、鋳物の介護食器[㊿]（富山県高岡市）、通気性のよい防塵衣（福井県勝山市）、保温性靴下[㊿]（奈良県大和高田市）、通気性高い耐熱手袋[㊿㊿]（和歌山県橋本市）、機能高めた手袋[㊿㊿]（香川県東かがわ市）、３次元炭素繊維織物[㊿]（愛媛県今治市）、和紙技術で日用雑貨[㊿]（愛媛県四国中央市）など。

## ３．原材料が地域特有、技術は一般的か地域外

加工方法よりも原材料が、地域独自の性格が強い場合である。

木材サッシ[㊿]（北海道旭川市）、干しいものアンチエイジング食品[㊿]（茨城県ひたちなか市ほか）など。

## ４．新たな用途

原材料や加工方法自体は必ずしも新しくはなくても、展開する市場や用途を工夫することによって、新しい需要を開拓する。

たもぎ茸による化粧品（北海道南幌町）、ホタテ貝殻で抗菌剤[㊿]（同網走市）、病院検査説明用木製玩具[㊿㊿]（神奈川県大井町）、天然わさび成分で除菌[㊿㊿]（静岡県伊豆市）、杉・ひのき材の空気清浄機[㊿]（同吉田町）、漁網技術ですべり止めマット[㊿]（愛知県豊橋市）、シカの白なめし革を使った福祉用具[③⑤⑥⑪⑭⑯⑰⑱㉒㉔㉖㉚㉛～㊹㊺㊿]（兵庫県姫路市）、書筆技術で化粧筆[㊿㊿]（広島県熊野町）、藍染め石鹸[㊿㊿]（徳島県吉野川市）、シャツ技術で検診着（愛媛県今治市）、久留米絣で手ぬぐい（福岡県久留米市）、畳（＝莫蓙）を家具に（同大川市）、天然竹材の温泉冷却装置[㊿㊿]（大分県別府市）、焼酎副産物の健康利用（宮崎県国富町）など。

## ５．新しい事業化の手法

他機関との連携や、個別企業・地域でのブランド化など、事業化の方法自体を工夫したものもある。

鋳物・家具・インテリアを集合ブランド化[㊿㊿]（山形市ほか）、木材の３次元圧縮と伊のデザイン（岐阜県高山市ほか）、手袋などの技術をブランド化（香川県東かがわ市）、オーダーメイドＴシャツ[㊿]（同さぬき市）、産学官連携で人間工学の椅子[㊿]（佐賀市）など。



事務局長だより

星川安之（ほしかわ やすゆき）

# 「！」の発見・再発見を糧にして「科博」で、スペインで、共立講堂で……

☆…共用品の仕事をしていると、いつも新鮮な「発見」や、時に「再発見」に出会う。それは、仕事を続けるうえでの大きな力となる！

今回は５～６月に出会った「！」のいくつかを、日記風に。

【５月16日　国立科学博物館】

３月の予算理事会での「共用品を、小・中学生が来る博物館で展示してはどうか？」との提案を受けて、東京・上野の国立科学博物館を訪問。

シャンプーのギザギザ、携帯電話の「５」の凸点など共用品を紹介すると、担当の方々から「夏休みのワークショップで、子供たちに共用品を紹介したらどうか。場所は提供する」と嬉しい提案が！

来る８月19～21日、同博物館で「共用品ワークショップ」を開催させていただくことになった。今からわくわくしている。

☆…

【６月５～９日　サラゴサ】

サラコザ万博の「バリアフリーサービス」の仕事で、スペインへ。仕事の合間をぬって、サラゴサ市内の“共用品確認調査”を行った。

薬屋さんでは、欧州の規格協会が進めている「薬箱への点字表示」を確認。スーパーでは、パエリア用のお米の紙のパッケージにも点字表示があることを発見した！

【６月14日　神田・共立講堂】

人間工学会主催のシンポジウムで、共用品について講演する機会があった。20分の持ち時間、35枚のパワーポイントの資料で壇上から話させていただいた。

会場の共立講堂は、中学３年の時、遠足の帰りに友人３人と初めて「かぐや姫」のコンサートを99円で聴いた思い出の会場！（当時はフォークコンサートの“聖地”だった）

壇上に上り、話をしながら、「35年前、かぐや姫がこの場所に立っていたのか……」と思うと、元フォーク少年は感慨無量でありました。

☆…

【６月21日　東京おもちゃショー】

今まで以上にマスコミへの露出度が多く、それが効いたのか、一般公開の初日は、入場１時間待ちという長蛇の列！

今回の目玉の１つは「日本おもちゃ大賞」の受賞製品の展示コーナー。障害のあるなしに関わらず共に遊べる「共遊玩具」をはじめ、全５部門で表彰された製品が展示された。さらに、日本玩具協会のコーナーでは、共遊玩具の新しいカタログとガイドラインも紹介されていた。

初めて「晴盲共遊玩具」が認定されてから約17年。玩具業界の共用品開発が基盤づくりから、いよいよ普及時期に入った感がある。大変嬉しく、心強く思った次第である。

（★）

# 共用品通信

【イベント】

○「サイトワールド2008」、11月２～４日に開催

（社福）日本盲人福祉委員会の主催による視覚障害者のための総合展示会。会場はＪＲ・地下鉄錦糸町駅前の「すみだ産業会館サンライズホール」（丸井錦糸町店８・９階）。詳細は、http://www.sight-world.com/。

【委員会】

○第18回共用品推進機構評議員会（６月12日）
○第20回共用品推進機構理事会（６月16日）
○第１回アクセシブルデザイン技術標準化開発委員会（６月23日）
○第１回アクセシブルデザイン本委員会（６月24日）

【講義・講演】

○早稲田大学教育学部（５月31日）

タカラトミー・高橋玲子さんと森川が、同大学生らに「共用品授業」。

○長野県デザイン振興協会平成20年度通常総会（６月４日）

「UDの実践と課題」と題して高嶋が講演。

○府中市立府中第一中学校（７月２日）

２年生約180人を対象に、森川が「共用品授業」を行った。

【来訪・来所】

○愛知県多治見市立多治見中学校　社会見学（５月29日）
○愛知県大府市立大府西中学校　社会見学（６月12日）
○愛知県犬山市立犬山中学校　社会見学（６月25日）
○韓国・京畿道（キョンギドー）職員がユニバーサルデザインの商品開発を目的としたヒアリング調査のため来所（６月13日）

**<読者の皆様へのお願い>**

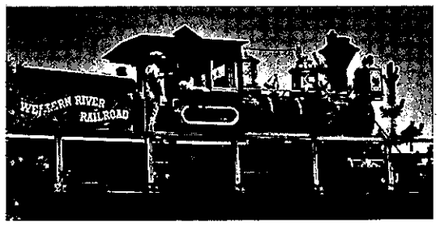
「共用品通信　情報アラカルト」欄では新製品・新サービス、セミナー・講演・展示会、モニター募集など、個人・法人賛助会員の皆様からのお知らせも掲載致します。事務局「インクル編集担当宛て」に、ニュースリリース、イベント案内などの情報をお寄せください。Eメールも歓迎です。

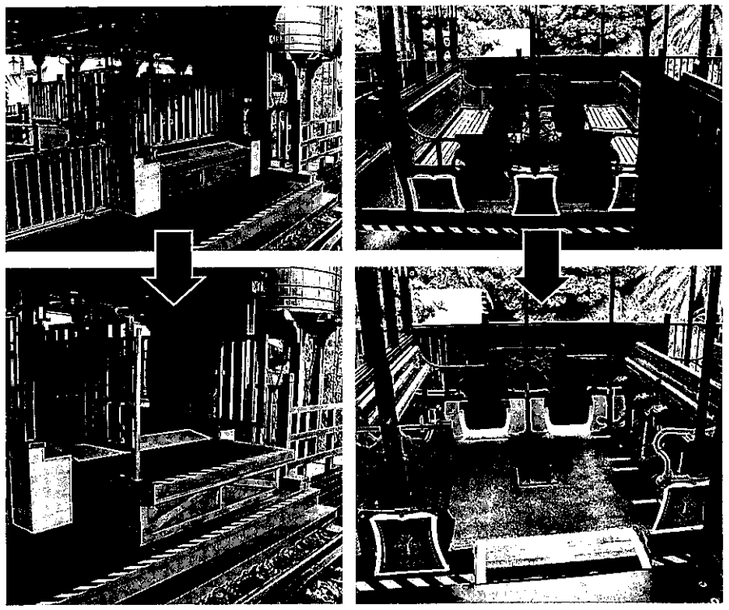
わが社のエース4

# 東京ディズニーランド「ウエスタンリバー鉄道」

## キャッホー、車いすで乗れる客車ができたよ！

©Disney



■東京ディズニーランド「ウエスタンリバー鉄道」
▽運営：㈱オリエンタルランド
▽開園時期：1983年４月
▽特徴：アドベンチャーランドとウエスタンランド内の約1.6㎞の軌道を約15分かけて１周するアトラクション。
▽入園料：5800円（大人＝18歳以上、1デーパスポート）ほか
▽問い合わせ先：東京ディズニーリゾート・インフォメーションセンター（ＴＥＬ：0570－00－8632）
▽ホームページ：http://www.tokyodisneyresort.co.jp/

今年、開園25周年を迎えた東京ディズニーリゾート。年間2500万人以上が訪れるこの人気テーマパークは、バリアフリーサービスに関しても、ハード、ソフト両面で「さりげない配慮と工夫」を積み重ね、障害のある人たちからも圧倒的な支持を集めている。

今年３月、車いす使用者も楽しめる施設がまた１つ加わった。人気アトラクション「ウエスタンリバー鉄道」がそれ。

ホームと客車の間に60㎝近い段差があるため、これまで車いす使用者は介助者に抱きかかえられて乗り移るしかなかった。そこで、約２年がかりで車いすのまま乗れる新しい客車を開発。併せて、駅舎の設備も一部改良した。

### 創意工夫で60㎝の段差を克服

車いす使用者はキャスト（スタッフ）の誘導に従い、駅舎正面に向かって左側の通路を進み、同鉄道用の車いすに移乗した後、エレベーターで駅舎２階へ。スロープを進んで、列車の到着を待つ。

車いすが乗れるのは、客車の先頭車両。列車が着くと、キャストがホーム側の柵を開き、続いて“魔法の引き出し”（可変式の延長ホーム）を伸ばす。一方、客車側では中央にある支柱をスライドさせて通常40㎝の間口を120㎝に広げ、車内のベンチを跳ね上げて車いす固定スペースを確保。最後に、ホームと客車の間に渡し板をはめ込んで準備完了。

この間、わずか数十秒。車いすは一度に２台乗ることができる。車いすのゲストからは「他のお客に迷惑をかける心配もなく、みんなと同じ車両で楽しめることが何より嬉しい」といった声が寄せられているという。　（高嶋健夫）

アクセシブルデザインの総合情報誌
インクル 第55号
2008（平成20）年7月25日発行
"Incl." vol.9 no.55
©The Accessible Design Foundation of Japan（The Kyoyo-Hin Foundation）, 2008
隔月刊、奇数月に発行
一般頒価　1部1000円
（但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています）

※視覚に障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはPDFファイルのフロッピーディスクを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行　㈶共用品推進機構
郵便番号 101-0064
東京都千代田区猿楽町2-5-4 OGAビル2F
電　話：03-5280-0020
ファクス：03-5280-2373
Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org
ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人　鴨志田厚子
事務局　星川　安之
森川　美和
金丸　淳子
水野由紀子
高橋　裕子
松岡　光一

編集長　高嶋　健夫
執筆・協力（五十音順）　後藤　芳一
高橋　玲子
竹島　恵子
塚本　薫
戸村哲次郎
山本百合子
印刷・製本　ベスト・イーグル㈱
サンパートナーズ㈱

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、㈶共用品推進機構までご連絡ください。
上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています